

ダニエル書11章36-45節 「終わりの日の王」

1A 自らを神とする王 36-39

2A 南の王との戦い 40-43

3A 王の終わり 44-45

本文

ダニエル書 11 章を開いてください。私たちは前回、11 章 35 節までを見てきました。北の王である、セレウコス朝の王と、南の王であるプトレマイオス朝の王の戦いが延々と続き、ついに、21 節で、アンティオコス四世エピファネスが現れます。「一人の卑劣な者」と呼ばれます。彼が、プトレマイオス朝、エジプトに遠征に行きます。大規模なものは二つありましたが、その帰り道に、美しい国イスラエルを荒らします。二回目に、その背きは極みに達し、荒らす忌まわしいものを聖所に置きます。しかし、その中で、賢明な者たちがイスラエルの中で起こされます。歴史的には、マカバイ家の者たちです。不誠実な者たち、神に背き、ギリシアの神々を拝み、アンティオコス・エピファネスに協力する者たちもいましたが、神を知る者たちは、堅く立って事を行いました。彼の勇猛さによって、信仰を公言しなくとも、隠れて付いて来る者たちもいました。

そして、35 節にこう書いてあります。「賢明な者たちのうちには倒れる者もあるが、それは終わりの時まで、彼らが錬られ、清められ、白くされるためである。それは、定めの時はまだ来ないからである。」彼らが、そのような患難の中で、倒れる者もありますが、けれども練り清められて、白くされます。そして、これが、「終わりの時まで」と言っているのです。ここで、飛躍があります。8 章において、アンティオコス・エピファネスが荒らす忌まわしいことを行っていることによって、預言が成就するのですが、「終わりの憤りの時に起こること(8:19)」であると、ガブリエルがダニエルに解き明かしました。飛躍があるんですね。

その 8 章のところでじっくり学びましたが、預言において、近未来に起こることを預言しながら、その背後で起こっている霊の戦いを浮き彫りにする預言があります。イザヤ 14 章では、バビロンの王に対する預言なのに、明けの明星と呼ばれる使いが、高ぶって、墮落する預言がありますが、バビロンの王の背後にサタンが働いていたからです。そして、終わりの日に起こることを、予め、アンティオコス・エピファネスが行っていることが示しており、言い方を変えれば、アンティオコス・エピファネスに、終わりの時の反キリストの霊が働いていたと言えるのです。

1A 自らを神とする王 36-39

そこで次、36 節以降に出てくる王の姿を見ると、到底、アンティオコス・エピファネスの生涯において成就したことを、歴史的に認めることのできない預言になっています。ここでは、そのギリシア

の王を越えて、終わりの日に現れる反キリストの姿が、直接的に預言されているのです。

³⁶ この王は思いのままにふるまい、すべての神よりも自分を高く上げて大いなるものとし、神々の神に向かって驚くべきことを語る。彼は栄えるが、ついには神の憤りで滅ぼし尽くされる。定められていることがなされるからである。

思いのままにふるまう、というのが、反キリストの大きな特徴です。反キリストが、だれからの力なのか？といったら、サタン、竜からの力であることは黙示録 13 章で読みました。「竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた。」とあります(2 節)。自分の思いのままに、事を行うというところに、高ぶりがあり、神への冒瀆へとつながるのです。ペテロ第二、ユダの手紙には、どちらも偽教師らの姿がありますが、「ユダ 8 この人たちは同じように夢想にふけて、肉体を汚し、権威を認めず、栄光ある者たちをののしっています。」今日、自分の感じたことが最も大事、自分の信じていることをするのが、正しいことなのだとしています。聖書の健全な教えから、真っ向から反対する教えであります。聖書は、神の言われていることが正しいことであり、この方に言われていることに服するのが正しいとしているのです。

そして、「すべての神よりも自分を高く上げて大いなるものと」するとあります。聖書には、まことの神が一人、おられます。けれども、人間は、主なる神ではない他の神々を拝みます。その偶像礼拝、結局、自分の願っていることを具現化している神であり、権力の神であったり、性欲の神、快樂の神、富の神であったり、自分の貪りに基づくものです。ですから、偶像礼拝は自分の礼拝とも言えて、自分自身に仕えていると言えます。

しかし、そうした貪りの表れである偶像の神々でも、満足していないのが、この男の姿です。それらの神々よりも、さらに自分を大いなる者としなければ気が済まないのです。人がここまで力を貪ることができるのかと驚愕するほど、欲深くなります。それが、「すべての神よりも自分を高く上げて大いなるものと」することなのです。ですので、私は、既存のものをことさらに全否定する人々のことは、とても警戒します。反キリストは、既存の神々、伝統的に信じ、敬われていた神々を否定していきましたが、それは、彼がまことの神をあがめるためではなく、結局、それら偶像礼拝者以上に、飽くなき欲望を満足させるために、否定していくのです。

そして、「神々の神に向かって驚くべきことを語る」と言います。これが、まことの神です。神々と呼ばれているものがあるが、すべてのものを支配しておられる方、イスラエルの神であり、主イエス・キリストの父なる神です。この方が、反キリストにとっては唯一、邪魔になる存在なのです。ですから、冒瀆します。これまでダニエル書で見えてきたとおりです、7 章 25 節に、「いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼす。」とあります。そして黙示録に、「13:5 この獣には、大言壮語して冒瀆のことばを語る口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられ

た。」とあるのです。

そして、「彼は栄える」と言っています。これから、どのように栄えるかを見ていきます。黙示録 13 章には、獣の国として、その刻印を押されている者たちは売り買いしている姿が出てきます。黙示録 17 章では、王たちが、獣の上に乗っている女と淫乱を行いながら、彼女が巨大な富を得ている姿を見ます。一時的に栄えるのです。

そして、「ついには神の憤りで滅ぼし尽くされる。定められていることがなされるからである。」とあります。このことは、ダニエル書での一貫したテーマです。人の像も、人手によらずに切り出された石で、粉々に砕けました。7 章の第四の獣も、人の子によって「さばきが始まり、彼の主権は奪われて、彼は完全に絶やされ、滅ぼされる。」とあります(26 節)。そして、黙示録 19 章では、反キリストが偽預言者と共に、キリストによって、生きたまま、燃える硫黄の池に投げ込まれることが書かれています。

そして、こういったことが、予め定められているのです。ここが希望です。ダニエル書では、何度となく、「定められている」という言葉があります。神はすでに、獣を滅ぼすことを決めておられるのです。どんなに荒廃をもたらしても、聖徒たちを迫害しても、滅ぼすことを決めておられます。黙示録では、何度となく、悪がはびこる時に、すでに天においては勝利が宣言されています。例えば、11 章、第七の御使いがラツパを吹き鳴らしたら、24 人の長老が、神を礼拝してこう言いました。「11:17 私たちはあなたに感謝します。今おられ、昔おられた全能者、神なる主よ。あなたは偉大な力を働かせて王となられました。」まだこれから、獣の国が出てくるのです。それであっても、神が偉大な力で、獣を滅ぼされると決めておられることを彼らは知っていたのです。

³⁷ 彼は先祖の神々を心にかげず、女たちの慕うものも、どんな神々も心にかげない。すべてにまさって自分を大いなるものとするからだ。

先ほど言いましたように、反キリストは、従来の伝統的な神々を心にかげません。当時の国々の戦いは、その国を代表する神と神の戦いとみなされていました。例えば、モアブの神はケモシュで、バビロンの神はマルドクですが、バビロンがモアブに勝ったら、マルドクがケモシュに勝った、ということになります。けれども、反キリストは、そういったことで飽き足らなかったのです。

同じように、「女たちの慕うもの」も心にかげません。これは、彼が同性愛者ということではありません。今、この預言をしているのは、ユダヤ人たちに対してのもので、エバが、カインを生んだ時に、「私は、一人の男子、主を得た。」と言いました(創世 4:1 参照)。なぜなら、神が、女の子孫が、蛇の子孫のかしらを打ち砕く、つまり、キリストが女が産む男の子から現れるという約束があったのです。それで、ユダヤ人の女たちは、自分の産む男の子がキリストであることを慕っていました。

つまり、反キリストは、自分の先祖の神々も心にかけていただけでなく、イスラエルのメシアにも心にかけてませんでした。

そして、「すべてにまさって自分を大いなるものとする」のです。この預言があるので、イエス様は、「預言者ダニエルによって語られた「荒らす忌まわしいもの」が聖なる所に立っているのを見たら」と言われました(マタイ 24:15)。聖なる所に入ってしまうのです。イスラエルの神以上のものにしようとしているのです。パウロは、テサロニケ第二で、「2:4 不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。」と言いました。

³⁸ その代わりに彼は岩の神をあがめ、金、銀、宝石、宝物をもって、彼の先祖たちが知らなかった神をあがめる。

反キリストは、「岩の神」すなわち軍事的な神、力の神を新しく造ります。「金、銀、宝石、宝物をもって」造ります。黙示録 13 章にある獣の国では、具体的にはもう一匹の獣、偽預言者が獣の像を造り、その像に物を言わせるようにすることが書かれています。「詩 20:7 ある者は戦車のある者は馬を求め。しかし私たちは私たちの神【主】の御名を呼び求める。」という信仰とは、正反対に、軍事的な力を拝んでいました。

似たようなことをした人物が、我が国にいます。武将、織田信長です。彼は、仏教などの従来の信仰や僧侶には、厳しい態度を取って来た人として知られています。そして、当時やって来た宣教師たちを積極的に受け入れていました。しかし、その中の一人フロイスは、「日本史」という著作で、次のように記しています。「安土山の寺院(摠見寺=そうけんじ)には神体はなく、信長は己自らが神体であり、生きた神仏である。世界には他の主なく、彼の上に万物の創造主もないと言い、地上において崇拜されんことを望んだ。」¹そして、自分の誕生日を聖日と定め、この寺に参拝するように命じています。建物の一番高いところにある「盆山」と呼ぶ石を置いて、自分の代わりに拝むように命じたそうです。それで、信長が本能寺の変で非業の死を遂げたことから、フロイスはこう記しています。「デウスのみに戻すべきものを奪わんとしたため、体は塵となり灰となって地に歸し、その靈魂は地獄に葬られた」

まさに、自分の先祖の神々に心をかけず、キリストにも心をかけず、自分を最も大いなる者として、自分を象徴する神を新たに造り、それを拝ませました。織田信長が反キリストではもちろんありませんが、同じようなことをしているということは、反キリストの霊が働いていたのかもしれませんが。

³⁹ 彼は異国の神の助けによって城壁のある岩を取り、彼が認める者には榮譽を増し加え、多くの

¹ https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1054704765

ものを治めさせて、代価として国土を分け与える。

反キリストは、かつてのアンティオコス・エピファネスと同じように、奪いとったものを分け与えることによって、自分の支配を広げます。アンティオコス・エピファネスがしたことが、前半部分に書かれていました。「11:24a 彼は不意にその州の肥沃な地域に侵入し、彼の父たちも、父の父たちもしなかったことを行う。彼は、そのかすめ奪った物、分捕り物、財宝を、自分たちの間で分け合う。」こうして、反キリストは全土を食い尽くしていきます。「7:23 第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。」

そして彼は、このことを「異国の神の助けによって城壁のある砦を取」ることによって、行うとしています。この異国の神とは何でしょうか？ 黙示録 17 章に出てくる、大淫婦バビロンのことでしょう。女が乗っている獣は、反キリストのことです。「17:2-4 地の王たちは、この女と淫らなことを行い、地に住む人々は、この女の淫行のぶどう酒に酔いました。」³ それから、御使いは私を御霊によって荒野へ連れて行った。私は、一人の女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神を冒瀆する名で満ちていて、七つの頭と十本の角を持っていた。⁴ その女は紫と緋色の衣をまとい、金と宝石と真珠で身を飾り、忌まわしいものと、自らの淫行の汚れで満ちた金の杯を手を持っていた。」バビロンには、巨大な富が集まっていましたが、同時に、濃厚な偶像礼拝を行っていました。同じように、終わりの日には地上の王を自分にひきつけ、偶像礼拝に関わるようにさせています。この宗教と政治の結託を支えているのが獣であり、獣はこの宗教と政治の融合体を利用して、着実に領土をわがものとしていくのです。

2A 南の王との戦い 40-43

こうして私たちは、反キリストが最後の週、第七十週に何をしていくのかを見ていきました。獣の国が確立していく姿です。そして次に、ハルマゲドンの戦いにまで至る姿を見ていきます。

⁴⁰ 終わりの時に、南の王が彼と戦いを交える。北の王は戦車、騎兵、および大船団を率いて南の王を襲撃し、国々に侵入し、洪水のように通り過ぎる。

「南の王」が反キリストに対して反旗を翻します。ここでは既に、エジプトのプトレマイオス朝ではなく、イスラエルの南にある国々であります。ダニエル 7 章を思い出してください、反キリストは第四の獣、つまりローマ帝国の中から出てきます。復興ローマと呼んでいいかもしれませんが、同じローマが復興すると思ったら間違いで、粘土と鉄が混じり合った足のようになります。かなり緩やかなものです。十の王国が緩やかにつながっています。その間から、小さな角として現れて、十のうちの三つを倒して、七人の王がその権力を反キリストに移譲します。そのことによって、絶対的な世界政府の王となるのです。ローマは歴史的にももちろん、欧州やトルコを中心としています。トルコは、東ローマ帝国が千年以上も存続したところですが、いずれにしても、イスラエルよりも北にある王として

君臨します。

しかし、イスラエルより南側にある国々が戦いを挑みます。エジプトや、ルブ、つまり今のリビアやクシュ、今のスーダンも戦いに行くでしょう。エジプトやクシュに対する預言を、イザヤ書で読むことができます。エジプトに対するものが 19 章、クシュに対するものが 18 章です。エジプトが弱くされ、そこで彼らが、イスラエルの神を求めます。すると救い主が来てくださる、つまりイエス様が彼らをも救ってくださるのです。読んでみます。「19:16-20 その日、エジプト人は女のようになり、万軍の【主】が自分たちに向かって振り上げる御手の前に、恐れおののく。17 ユダの地はエジプトにとって恐怖となる。これを思い出す者はみな、万軍の【主】がエジプトに対して図る計画のゆえにおののく。18 その日、エジプトの地には、カナン語を話し、万軍の【主】に誓いを立てる五つの町が起こる。その一つは、イル・ハ・ヘレスと言われる。19 その日、エジプトの地の真ん中には【主】のために一つの祭壇が建てられ、その国境のそばには【主】のために一つの石の柱が立てられる。20 それはエジプトの地で、万軍の【主】のしるしとなり、証しとなる。彼らが虐げられて【主】に叫ぶと、主は彼らのために戦い、彼らを救い出す救い主を送られる。」

そしてクシュですが、エジプトの南にある国です。今のスーダンですが、18 章に、最後の最後には彼らも、「18:7 万軍の主の名のある場所、シオンの山へ、万軍の主のために贈り物が運ばれてくる。」と、彼らも終わりの日に主にひれ伏す姿が預言されています。

こうして南の王が攻めてくるので、北の王、つまり反キリストが率いる勢力が、「戦車、騎兵、および大船団を率いて南の王を襲撃」すると言っています。陸は戦車や騎兵、また地中海を使って、大船団を率いて、エジプトに乗り込んでいきます。その間に、通り道の国々を踏みつけていき、洪水が押し寄せたようになります。その国々に、イスラエルまた、ヨルダンがあるのです。

⁴¹ 彼は美しい国に攻め入り、多くの者が倒れる。しかし、エドムとモアブ、またアンモン人のおもだった人々は、彼の手から逃げる。

「美しい国」つまり、イスラエルです。すでに、エルサレムには、荒らす忌まわしいもの、つまり獣の像が安置されています。そこに追い打ちをかけるように、攻め込み、多くの者が倒れます。この様子を預言しているのが、ゼカリヤです。「14:2 わたしはすべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。都は取られ、家々は略奪され、女たちは犯される。都の半分は捕囚となって出て行く。しかし、残りの民は都から絶ち滅ぼされない。」イエス様はユダヤから逃げなさいと言われましたが、まだ残っている人たちがいます。その人たちも、北からの軍隊によって攻められて、都の半分が取られてしまいます。

しかし、「エドムとモアブ、またアンモン人のおもだった人々は、彼の手から逃げる。」のです。北

と南を行き来する時に、ヨルダン川を挟んで、西がイスラエル、東がヨルダンです。ヨルダンには、今の首都アンマンがあるアンモンがあります。その南には、死海の東にモアブがありました。そして死海の南から紅海にかけて、エドムがあります。順番が、エドムからモアブ、アンモンとなっているので、北の王、反キリストは、南のエジプトを攻め行ってから、帰りに南から北に攻め取ろうとしたのかもしれない。

しかし、これらが逃げるのです。ここが、とても不思議なところですが、神のご介入があることは間違いありません。それと、そこにいる人々が、その地形を利用して上手に隠れたのかもしれない。すでに、イスラエルの残りの民は、ユダヤ地方から山々に逃れています。荒野に逃れています。以前、お話ししたように、マタイ24章において、荒らすいまいしい者が聖なる所に入って、経つのが見たら、ユダヤにいる人々は山々に逃げなさいとイエス様は言いつけておられました。それから、黙示録12章では、女が竜から逃れて、荒野に行ったことが書かれています。荒野で山々というのが、エドムの山地の特徴です。こげ茶色のはげ山が延々と続き、ボツラは、山々に取り囲まれた盆地のようになっています。今の世界遺産のペテロではないか？と言われていています。その黙示録のところを読んでみましょう。「12:14-16 しかし、女には大きな鷲の翼が二つ与えられた。荒野にある自分の場所に飛んで行って、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前から逃れて養われるためであった。15 すると蛇はその口から、女のうしろへ水を川のように吐き出し、彼女を大水で押し流そうとした。16 しかし、地は女を助け、その口を開けて、竜が口から吐き出した川を飲み干した。」地が助けてくれました。だから、アンモン、モアブ、エドムのおもだった人々も、地形によって助けられたのではないかと、思います。

⁴² 彼は国々に手を伸ばす。エジプトの地もその手を免れることはない。⁴³ 彼は金や銀の秘蔵物と、エジプトのすべての宝物を手に入れ、ルブ人とクシュ人が彼につき従う。

先ほど話しましたように、エジプトが一時、反キリストに攻め取られてしまいます。そして、「ルブ人とクシュ人が彼につき従う」とあります。リビアもスーダンは、初めエジプトのほうにいましたが、攻め取られてしまった今、反キリスト側に付かざるをえなくなっているのでしょうか。今の世界情勢でも、二カ国は同じです。例えばスーダンですが、アブラハム合意に入ったものの、国内では反対が多く、表だってイスラエルと歩調を合わせる行動を見せていません。状況次第で、立場を変えていくのでしょうか。

3A 王の終わり 44-45

⁴⁴ しかし、東と北からの知らせが彼をおびえさせる。彼は多くのものを絶滅させようとして、激しく怒って戦いに出て行く。

反キリストの体制は、盤石ではなく、このように不安定なものになっています。東からの知らせと

いうのは、黙示録 16 章にある、東からの王たちが、ハルマゲドンに集結する出来事のことでしょう。「16:12-16 第六の御使いが鉢の中身を大河ユーフラテスに注いだ。すると、その水は涸れてしまい、日の昇る方から来る王たちの道を備えることになった。13 また、私は竜の口と獣の口、また偽預言者の口から、蛙のような三つの汚れた霊が出て来るのを見た。14 これらは、しるしを行う悪霊どもの霊であり、全世界の王たちのところに出て行く。全能者なる神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを召集するためである。15 ——見よ、わたしは盗人のように来る。裸で歩き回って、恥ずかしい姿を人々に見られることのないように、目を覚まして衣を着ている者は幸いである——16 こうして汚れた霊どもは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる場所に王たちを集めた。」ここでは、竜、獣の口から出た霊が、そうさせているとあります。おそらく、反キリストは、東からの王たちの動きを察知して、彼らが集まって来るのを見事に利用して、自分の傘下に入れることに成功したのではないかと思います。

そして、「北からの知らせ」であります。これは、エゼキエル 38-39 章の、ゴグの連合軍のイスラエルへの攻撃のことではないか、という人たちがいます。イスラエルの北に位置するからです。ゴグとマゴグの戦いがいつ起こるのか、については、いろいろな意見があります。第七十週の前、半ば、そしてここにあるように、ハルマゲドンの戦いの中で起こる、という見方をしている人々もいます。私は、いつなのか、ということについては、まだ決着がついていません。もし、これがゴグとマゴグの戦いでなければ、単純に、東から来る王たちは、いったん、ユーフラテス川の上流の方に動き、それから南下するので、東から来て、そして北から来るというのは、同じ軍隊と考えてもおかしくありません。

ここで大事なのは、反キリストが焦って来て、怒りを増してきているということです。悪が怒っている時に、私たちは励まされるべきですね、自分の終わりが近づいて焦っているのです。天において、こんな賛美の言葉があります。「11:18 諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りが来ました。死者がさばかれる時、あなたのしもべである預言者たちと聖徒たち、御名を恐れる者たち、小さい者にも大きい者にも報いが与えられる時、地を滅ぼす者たちが滅ぼされる時です。」

⁴⁵ 彼は、海と聖なる麗しい山との間に、本営の天幕を張る。しかし、だれも助ける者はなく、ついに彼は終わりを迎える。

「海と聖なる麗しい山」とは、地中海とエルサレムの間です。ハルマゲドン、メギドは、エルサレムよりは北にあります。そこら辺の地域です。そして、一気にこれら集結した軍隊を使って、エドムのボツラにいるイスラエルの残りの民に攻撃し、またエルサレムそのものを完全に抹消すべく動き出します。

主は、天から現れ、地上に戻って来られる時、最終的にはエルサレムの東、オリーブ山の上に

立たれます。けれども、そのままそこに行かれるわけではありません。ハバクク 3 章によると、パランの荒野の方面から現れます(3:3)。そして、エドムのボツラに行きます。そこで、反キリストの軍隊をことごとく打ち滅ぼされます(エレミヤ 49:13-14)。そして、返り血を浴びた衣を着ながら、主は、エルサレムにいる住民を救うべく、ボツラの方面からエルサレムに向かわれます。イザヤ 63 章 1-6 節です。「1 「エドムから来るこの方はだれだろう。ボツラから深紅の衣を着て来る方は。その装いには威光があり、大いなる力をもって進んで来る。」「わたしは正義をもって語り、救いをもたらす大いなる者。」2 「なぜ、あなたの装いは赤く、衣はぶどう踏みをする者のようなのですか。」3 「わたしはひとりでぶどう踏みをした。諸国の民のうちで、事をともにする者はだれもいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みにじった。彼らの血の滴りはわたしの衣にはねかかり、わたしの装いをすっかり汚してしまった。4 復讐の日がわたしの心のうちにあり、わたしの贖いの年が来たからだ。5 見回しても、助ける者はだれもなく、支える者がだれもないことに啞然とした。それで、わたしの腕がわたしの救いとなり、わたしの憤り、それがわたしの支えとなった。6 わたしは怒って諸国の民を踏みつけ、わたしの憤りをもって彼らを酔わせ、彼らの血の滴りを地に流れさせた。」この情景は、黙示録 14 章にもあり、「血がその踏み場から流れ出て、馬のくつわの高さに届くほどになり、千六百スタディオンに広がった。(20 節)」とあります。約 300 キロメートルの長さですが、それはちょうど、ペトラからエルサレムまでの距離と同じです。

戦いは、最後は、エルサレムにすべてが集まります。イエス様は、これらの国々と戦われます。ゼカリヤ 14 章によると、なんと彼らは立ったまま、その場で腐っていきます。「14:12-13 これは、【主】がエルサレムを攻めるとの民にも加えられる疫病である。彼らの肉は、まだ足で立っているうちに腐る。彼らの目はまぶたの中で腐り、彼らの舌は口の中で腐る。13 その日、【主】からの大いなる混乱が、彼らの間に起こる。彼らは互いに手をつかみ合い、互いに殴りかかる。」そして、イエス様が再臨される時に、これらの軍隊と戦われるので、そこに死体が転がっています。それを、黙示録 19 章では、神の大宴会ということで、猛禽類がたらふく食べます。当時、きちんと埋葬されない、野垂れ死にされることは、極めて不面目なことであり、神の裁きの厳しさを表しています。

このようにして、反キリストは徹底的に滅ぼされます。テサロニケ第二 3 章 8 節をお読みします。「その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。」どんなに不法がはびこってしようと、私たちは主が裁いてくださるのを知っているのです。心強いです。こうした惑わしに対する裁きがあるので、パウロは続けてテサロニケの人たちにこう言いました。「Ⅱテサ 2:13-14 しかし、主に愛されている兄弟たち。私たちはあなたがたのことについて、いつも神に感謝しなければなりません。神が、御霊による聖別と、真理に対する信仰によって、あなたがたを初穂として救いに選ばれたからです。14 そのために神は、私たちの福音によってあなたがたを召し、私たちの主イエス・キリストの栄光にあずからせてくださいました。」